

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：Sophie Handford（ソフィー・ハンドフォード）（ニュージーランド）
- (2) 年 齢：21 歳
- (3) 参加事業：2019 年度「世界青年の船」事業（※SWY32 相当）参加青年（2019 年度）
- (4) 職 業：ニュージーランド・カピティコースト地区（地方自治体）議員



■ 事業参加のきっかけ

Facebook で最初に「世界青年の船」事業（以下、「世界船」という。）の青年募集告知を見た時、世界中の若者がこのようにつながり、学び、共有する機会があることにとても驚きを感じました。「よい事業すぎて本当と思えない、何か裏にカラクリがあるのでは」と疑ってしまったほどです。自分でもう少し調べ始め、そして面接で既参加青年と話げできた時、「これは真実だ」と分かりました。日本政府主催であることや、ニュージーランド代表団が過去に参加していることや、ヘレン・クラーク元首相も既参加青年であり、それだけ歴史がある事業だと知りました。私は、私たちの地球と気候変動に深く情熱を抱いており、そして将来の世代にとって最高の先祖でありたいと考えており、この同じ使命と目的のもとに形成されるグローバル・コミュニティの可能性に大きな興奮を覚えました。このプログラムの内容がどんなものかを知る中で、さまざまな手段で参加者へインパクトを与え、人生を変える力を持つものだと理解し、世界船に応募することは当然のことのように感じました。第 32 回には、80～100 人程度が応募したと聞いた記憶があります。

■ 既参加青年が出発前の参加青年をサポート

「世界青年の船」について少しは理解していたものの、何を期待すればいいのかよくわかりませんでした。日本への出発直前にニュージーランド代表団が初めて会した集まりには、既参加青年も参加し、彼らの経験を共有してくれたことをよく覚えています。他国の事後活動組織でもそうだと思いますが、ニュージーランドでも選考過程や乗船前のアドバイスに、事後活動組織が関わることがあります。ですので、面接の前や準備の段階で、既参加青年にお世話になったのですが、実際に対面で会えたのはこの出発前のタイミングでした。私たち第 32 回の青年は、「世界青年の船」についての質問が止まらず、ある時点で既参加青年は質問に答えきれず、代わりに「言葉にできるものではない」と返す場面がありました。実は準備の段階でも、「この事業に何を期待したらいいですか？どんな展開になるのですか？」と質問していたのですが、「ただ信じて身を任せる、そうすれば人生が変わる旅になる」というような答えだったのです。このとき、私たちはこれからとても大胆な、素晴らしい旅に出るのだと感じ、そして私が持っていたどんな期待さえも、打ち負かしてしまうような経験になると思いました。私は、何かを期待するのではなく、すべてを吸収し、その場その場を「味わう」ことに気持ちを切り替え、準備することにしました。電波も Wi-Fi もない洋上での長期滞在や、すでに議員の職にあつたので（ニュージーランドでは 18 歳から被選挙権があり、18 歳で当選）6 週間も仕事を休むことに少し不安はありましたが、太平洋の真ん中で大変素晴らしい青年たちと一緒に過ごせる数週間だと捉え、準備しました。議員に立候補したのは、「世の中にインパクトを与えたい」と思い、どうやったらそれが実現できるかを考えた結果です。政治の世界は、「年長男性の特権で、長く居座る」というイメージもありますが、私たち市民はもっと多様で背景も様々ですから、自らが変革となり、多様さを持ち込むことは良いと考えました。私のような「若年女性」が政治に関わることは、次世代にも良い影響がありますし、それを実行してきた先

人たちがいます。そして私たちに関わる気候変動や不動産の高騰、新型コロナウイルスなどへの対応が必要です。ですから、政治は私にとっては「手段」なのです。

「言葉にできるものではない」という描写もありますが、第 32 回の体験をお伝えするならば、私たちが作った歌の歌詞に近いかもしれません。“Let the world see what we can truly be, living in harmony”（調和とともに暮らすこと、私たちが真にどうあることができるか、世界にそれを証明しようではないか）。そして「**一体感、調和、共にあること**」（unity, harmony and togetherness）という言葉が、世界船を最もよく表していると思います。私の人生の中でベストの体験でした。そして世界船を体験した人は参加回が違っててもすぐにつながることができ、一瞬にして素晴らしい共通体験を分かち合うことができます。

■感情が溢れ出す日常の体験

私の不安や緊張は、参加青年たちに会い、友達を作り、驚くほど興味深い会話をした瞬間に、完全に頭から消え去りました。これが始まりに過ぎないと、その時は知る由もありませんでした。私は毎日、自分の身体と心で、感じていたことを思い出します。その瞬間瞬間も、振り返ったときも、多面性があり、間違いなく大胆な体験でした。時には踊り歌い、泣き、夜更かししたこともあれば、早起きしたこともありました。どんな期待を私が抱こうとも、その 1000 倍は満たされたと感じます。一つ体験談を共有すると、メキシコでの寄港地活動中、私たちはいろいろな活動をし、国境まで行ったりしたのですが、「ああ、これが国境の壁か」と目の当たりにした時、キャビンメイトの日本青年が隣にいて、私たちは二人とも涙が止まらず、「悲しいから？ 嬉しいから？ 涙が止まらないね」と、メキシコの街頭で大泣きをしてしまいました。そして船に戻ってきた時、もう一人のキャビンメイトであるスリランカ青年が、「感情が高ぶって、それがストレスになってしまったようだ」と気付きました。その日の夜、多くの青年がパーティを楽しむ中で、私たち 3 人は「ガールズ・ナイトをしよう」と決め、キャビンに籠り、お互いを労うためにネイルをしてあげたり、マッサージをしたり、音楽を流したり、ゆったりと過ごしました。自分の感情をそのまま話すことができ、心から楽しい瞬間でした。



キャビンを共にしたスリランカ青年と日本青年

■船上で「自分は何者か」を考える

私たちは朝日、夕日、イルカを見て、日本、メキシコ、ハワイを訪れました。レターグループの仲間と朝日を見ようと決めて、早起きしてデッキに出て、人生について、将来について話したのです。この時も、自分は自分らしく穏やかでいられ、平

和を感じることができました。これらを全て体験することで、私の最も深い内面の部分で、**自分が何者であるかを考える**ためのスペースが生まれたという意味でも、大胆でした。これは、世界船がプログラムの中で意図的に考えを促した結果でもあり、自然発生的に起きたこととも言えます。プログラム中は、誰も「あなたはこんな人」と期待することもなく、誰も「自分が何者なのか」分からず、自分と向き合います。ですから、**惜しげもなくそのままの自分を出す**こととなります。もう一つ私たちがやったこととして、女性の参加青年でグループを作り、「女性のエンパワーメント記念撮影会」をしました。ペルーの参加青年が写真を撮ってくれ、撮影中、私たちはお互いに「あなたは美しい」「あなたの髪は風に美しくなびいている」「あなたの笑顔は周りを明るくする」「あなたの肌は輝いている」「あなたは太陽の光線のような存在」「あなたは世界に影響を与えることができる」と声を掛け合い、友愛の気持ちを注ぎ合いました。また、その活動の一環で、「私は何者か」という問いに、それぞれが向き合い書き留める、というワークも 1 時間ほど行いました。その中で、私も「私は何者か」に向き合いました。何をしている人か、職業は、ということではなく「私らしさとは何か」を考えました。



「女性のエンパワーメント記念撮影会」の様子

■リーダーシップの経験を青年に伝える

私のキャリアパスとスキル開発に関して、**世界船によって真に強化されたと考える 2 領域は、「自信」と「リーダーシップ」**です。この 2 つは、他のどんなプログラムでも、同じようには恩恵を受けられないと思います。船内の様々な委員会構成の中で活動し、**リーダーシップを通して前に出てサポートする機会と、一歩下がってチームプレーヤーのスキルを開発する機会**の両方があったことで、役に立ちました。私はこれまで、前に出るタイプのリーダーシップを取っていました。なぜなら、2019 年は気候変動に関して声を上げる運動をニュージーランドで展開しており、17 万人ほどを動員して、メディアの取材を受けたりしていたからです。それに対して、世界船が教えてくれたのは、「他者をサポートし、その人のリーダーシップの可能性を開花させる」ことも素晴らしいということでした。私は前に立つリーダーをすでに経験していたので、私がしてきたような体験をまだ体験していない人に、挑戦してみようと思ってもらえるような働きかけです。そうすることで、あらゆるタイプのリーダーが出現しますし、私の経験にもなりました。これは、私たち各自が、より小ぢんまりと、**威圧感を与えないようなグループ設定でスキルを実践、開発する機会を持つことができた**という意味です。また、一般的には、この経験全体が私を人間的に成長させ、自分ではこれまで気づいていなかったスキルが開花したと思っています。日本青年は控えめに見えることもあります。環境（Global Environment and Climate Change）コースで気候変動に熱意ある日本青

年がいて、意気投合して自主活動を一緒にやろうと話したのですが、彼女の始めのリアクションは「いいかもしれない、でも私にできるか分からない、どういステップを踏めばいいのか分からない」という感じでした。そこで、「一緒にやろう。あなたには日本青年に声かけしてもらって、私は海外青年に声かけてみるから、それで一緒にできるよ」と働きかけたのです。彼女は当初、自分や自分のアイデアに自信がなさそうに見えることもあったのですが、そのアイデアを聞くと本当に素晴らしいもので、私には思いつかなかったアイデアでした。最後には、彼女が活動の中心となり、自分で考えて先導して進むようになり、一ターへと変化しました。彼女とは今でもこの時の話をするのですが、私の経験が役に立ったと思える瞬間でした。

■ 語学力が違ってコミュニケーションできる

日本青年はいつでも親切で、思いやりがあり、助けてほしい時にいつも助けてくれ、信頼が置けました。キャビンメイトやコース・ディスカッションの仲間とは、本当に仲良くなりました。とても気さくで、ウクレレを弾こう、ボードゲームをしよう、などどんな場面でも一緒にいて心地よさを感じました。日本青年と海外青年に大きな違いは感じませんでしたが、一つだけお伝えするとしたら、英語力に自信がない日本青年が、それを理由に話し合いに参加しない、挑戦すら止めてしまう、というのは勿体ないと思います。英語力に自信がないと、英語がたまたまネイティブの私のような青年にジャッジされると思うのかもしれませんが。しかし私には日本語が分かりませんし、船上では誰もが母国語と英語で暮らし、英語をサポートし合っています。結果的に、どんな英語であっても、レベルや理解力がバラバラでも、話してコミュニケーションする、ということができるからです。

■ 自由時間にも学びが詰まっている

この船事業は非常に充実しており、船内では**参加青年としてとてもサポートされている**と感じました。これは、政府（内閣府）のプログラムであることも関係していると思います。内閣府のプログラムということで、**表敬訪問の機会**もあり、**国際青年の外交が続くための流れを参加者間で理解**するのにとても役に立ちました。世界船と海外留学の違いは、**11 か国からの参加者がいること、船で行われること、そして共通の体験や旅路を通じて、絆を深める機会があること**です。このようにすでに非現実的と思える経験に、ホストファミリーと一緒に過ごす機会が加わり、さらに別の次元を加えてくれます。**いい意味で、他とは全く違うもの**なのです。寄港地活動も、船上活動のいずれも、確かに特別なものでした。旅路、航海という言葉に象徴されるように、私たちの多くにとって経験したことがなく、一緒に分かち合い、一緒に光を浴びるような新しい体験です。船は狭い空間なので、困難もありますが、**迅速に親密な関係を築くチャンス**でもあります。船酔いやホームシックに悩まされる人もいつ、全員がその中で**レジリエンス（回復力）を身につけました**。

6 週間という期間や、最後に日本のホストファミリーと過ごせる体験は素晴らしかったので、すでに素晴らしいプログラムにさらに何かを、ということではないのですが、船内の生活においてもう少しスケジュール外でお互いを知れる時間が取れたらさらに有益と思います。もちろん公式活動であるレター・グループや、コース・ディスカッション、それ以外でも青年と知り合う接点はありましたが、表面的に終わってしまうものもありました。1 日のスケジュールに追われてしまいがちなので、例えば 1 日の中で「この 2 時間は完全フリー」というような時間が取れると、**制約のない中でよいアイデアが生まれる**からです。前述の「女性のエンパワーメント記念撮影会」も、そのようにたまたま得た 2 時間の自由時間の中で、思いつきで「せっかくだからデッキに出てみない？」と提案があり、行ったものなのです。自分で決定し、学び、振り返ることのできる活動が、自由時間によりさらに生まれたかもしれません。

■ 環境啓発運動を展開

船内活動である「ピア・ラーニング・セミナー」（参加青年が主催することができ、青年同志で学びあえる公式活動）は、私のキャリアパスとスキル開発に特に有益でした。ニュージーランドではパブリック・スピーキング（人前で話す）の経験はあったものの、英語レベルの異なる多様な聴衆に向けてメッセージをまとめていくやり方は、非常に有益な学習でした。分かりやすい単語で、適度なスピードで（ゆっくり過ぎてもバカにされていると感じてしまうことがある）、伝えたいことをまとめ、という工夫をしました。結局のところ、伝わっていなければコミュニケーションを取る意味がないからです。目的や意図があって、そのために小さな努力や挑戦をしていたので、その時は負担や課題という意識はありませんでした。そういった挑戦も含めてコンフォート・ゾーンから出たのは、素晴らしい体験でした。将来は、世界船が私に力を与えてくれたように、**人々と地球をより良くするために国際的な仕事をしたいと考えています**。また、世界船のおかげで**私が必要と考えるスキルの多くに気づくことができました**。船上である参加青年と一緒に、「フライデー・フォー・フューチャー」（未来のための金曜日、環境活動家グレタ・トゥーンベリ氏の抗議活動）と言うキャンペーンを企画したことも、私にとっては力を感じる瞬間でした。



「未来のための金曜日」活動メンバー

この活動は、他の青年に対して気候変動の意識啓発をするために行ったものです。というのも、気候変動は全世界で起きているからです。取組が進んでいる国も、遅れている国も、もっとやらなければいけないという思いで、資料やビデオを作ったり集めたりして、事業後に使えるよう紹介しました。コース・ディスカッションとも連動させて、自分たちの今いる客船ではどんなことが起きているか、船の燃料や廃棄食料についても計算し、船でのサステナビリティについて考えました。啓発に当たっては、40～50人の賛同者が集まり、船内を練り歩き、「何が必要？」「気候への正義！」「いつ必要？」「今！」という掛け声と共に、参加青年に訴えかけました。こうやって環境意識を高めることで、プログラムが終わっても排気や自然を考えて、自分のできる範囲で行動しています。

■ 事後活動

私はニュージーランドの世界青年の船事後活動組織に所属して、この事業に貢献出来ることはなんでもしたいという思いで活動しています。今やっていることの一つとして、最近起きたトンガでの自然災害へのサポート活動を行い、トンガの事

後活動組織と連携し物資を送りました。また、事後活動組織とは直接関係しませんが、私の行っている環境活動に、先ほどの環境コースの日本青年にもオンラインで参加してもらい、運動を国際的にしていくなど、自分の既存の活動に関心を持ってもらえそうな人には声をかけてつなげるということをしています。

私はボランティア活動を続けていますが、「世界青年の船」事業が、**参加前に自分が関わっていた活動の目的を分析するきっかけとなりました。**私に変革への情熱を注ぐのは気候変動の分野であり、私たちが愛するものはすべてプラネタリーバウンダリー（訳注：地球の限界（この限界を超えてしまうと、不可逆的・壊滅的変化を起こすとされる））にあり、一度この地球を破壊すれば、私たちは故郷を失うことになるかと認識しています。

私は現在、**アオテアロア・ニュージーランドの世代間気候大使**の一員としてのコーディネート、青少年のためのワンストップ・サービス「カピティ・ユース・サポート」の理事、また、ジュン・メイン・グールド・リーダーシップ・アワード（June Mayne Gould Leadership Award）を受賞したことから、タイで開催される「APEC Voices of the Future 2022」主催チームのアドバイザーを務めています。アオテアロア・ニュージーランドの世代間気候大使の活動は、私とジム・サリンジャー博士（気候変動研究者）が立ち上げたものです。スウェーデンのグレタ・トゥーンベリ氏が「未来のための金曜日」を始めたように、最近サー・デイビッド・アッテンボローと対話をしたように、ニュージーランドでも何かできないかと考えました。サリンジャー博士と私は世代の異なるスピーカーたちを集め、大学教授や、神学者で 103 歳のサー・ロイド・ギーリングが加わったかと思えば、12 歳で校内での環境活動に取り組む小学生、太陽光でジュース搾りを行う事業家、そして 2 年前に首相から表彰を受けた気候研究家のジェームス・レンウィック博士など、世代間気候大使は 25 名ほどいます。月に一度、私かサリンジャー博士が進行役を務め、大使を務める方々どうやったらさらに活動を広められるか、どう政府に圧力をかけられるか、コミュニティと何ができるか話し合うなど、対話を重ねています。ネットワークを通じたカジュアルな会話を創出する、ボランティアベースのとてもやりがいがある活動です。私は、若者の発言や行動を高めたり力を与えたりし、私たちの環境と地球により良い影響を与える活動に参加することが好きです。**私の考える社会貢献の目的や、社会貢献の持ちうる力は、「世界青年の船」事業での経験を通じて変化し、私たちの積極的な貢献がいかに横断的であるか、またそうあるべきかを理解しました。**

最後に、「世界青年の船」事業の成果として、人と人との関係が築かれ、育まれ、維持されていることは、特別なことだと感じています。私が今でも最も強い絆で結ばれているのは、航海前半で私のキャビンメイトだったスリランカ青年と日本青年です。私たちはただ友達になったのではなく、姉妹と言えるほどの関係になったのです。世界的な感染症大流行が起きている今、ニュージーランドにいたことがどれだけ幸運なことなのか、キャビンメイト二人のことをいつも考えています。今でも 2、3 週間ごとに電話をしており、二人のレジリエンス（回復力）には圧倒されます。彼女たちを姉妹と呼べるなんて、私は本当に幸せです。そして、世界青年の船のファナウ（whānau、マオリ語で「家族」）の一部であることに、とても感謝しています。

ソフィー・ハンドフォード氏のプロフィール

ニュージーランド、カピティ出身、21 歳の議員、活動家。幼い頃から環境問題を身近に感じ、地球を守る必要性を強く感じていた。カピティ・カレッジでは、サービスキャプテン（奉仕活動リーダー）、生徒代表、ヘッドガール（最上学年での女子生徒代表）を歴任。卒業後、「School Strike 4 Climate」（気候のための学校ストライキ）を組織化し、呼びかけた運動は 2019 年 9 月に全国で 17 万人を動員するまでとなる。2019 年に 10 年以上ぶりの最年少となる 18 歳でカピティコースト地区の議員に当選し、現在は政治家として活動する。